

特集 横浜キャンパス図書館ラーニングコモンズ開設報告

はじめに

川村 久美子

横浜キャンパス図書館は、2018年度にラーニングコモンズの開設を含めた図書館改革を行った。ラーニングコモンズとは名の通り、学びのための共有スペースである。まずは図書館のハード面でのリニューアルを行った。情報のデジタル化に対応してIT環境を整備し、またグループ学習が可能なように人数に合わせて自由に組み合わせられる多様な椅子や机、ホワイトボードやプロジェクターなどを備え、ミーティングやプレゼンテーションを行うスペースも作った。またソフト面での改革も実施してきた。情報・資料の収集やレポート作成などを支援するスタッフを配置し、また各種のセミナーを行ってきた。特に横浜キャンパス図書館は以前から学生モニターの自主的活動が盛んだったので、ここでもそれを生かした図書館改革を行ってきた。本特集では横浜キャンパス図書館の改革の詳細について報告する。

いま教育現場ではアクティブ・ラーニングが重視されている。文科省が今後の「大学教育はいかにあるべきか」を諮問した中央教育審議会が答申（『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』答申、平成24年8月）^[1]のなかで、受け身の学習観を基盤としたこれまでの授業を改善し、アクティブ・ラーニング（能動的学習）の手法を取り入れ、主体的・対話的で深い学びを実現する授業にすべきだと提言している。教員による一方的な講義形式の教育ではなく学生が主体的に問題を発見し解を見出していく教授法、学修者の能動的な学修への参加を取りこんだ教授法が重要としたのである。そして発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどを役に立つ手法として取り上げている。新たな教授法によって、学生の認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図ろうというのだ。

アクティブ・ラーニングを推奨する流れの背景には学習観の変遷がある。古典的学習観では、学習とは個の作業であり、心的表象の操作であると考えた。この学習観こそが、近代化の過程で世界中が取り入れた学校教育を支え、学校教育の「場」を作り出してきた。すなわちそこでは一人の教師が多数の生徒に対峙し何もない状況で知識を伝授する。準備されるのは教師に黒板とチョーク、生徒にペンシルとペーパーだけである。これは知識が教師の頭のなかにあって、言葉を通して生徒に伝授されると考えるから許される。言葉を書き取るための黒板とチョーク、ペンシルとペーパーという道具があれば十分、それで学習は成立すると考えるわけだ。

これに対して、レイブとウェンガー（1993）^[2]は、学習とは教室のような貧弱な状況で生じるものではなく、場に特有な道具や熟練した参加者がすでに存在する日常的活動の場において、実践的共同体へと参加することを通して生じるものであると議論した。学習は「状況に埋め込まれている」というのである。彼らは実践的共同体への参加を、正統的周辺参加（新

参加者の状態)から十全参加 (full participation) の状態へと移行しながら、共同体の成員としてのアイデンティティを獲得して成長する過程として描き、それこそが学習であると述べている。状況的学習論と呼ばれるこの新たな学習観は、いまや認知科学者や学習研究者の間で共有されている。また広く学校教育への批判の根拠にもなっている。

新たな学習観のもとで、大学教育の現場もアクティブ・ラーニングを促す場づくりをしていかなければならない。そのうち図書館はアクティブ・ラーニングの要とされており、図書館改革が望まれる理由である。図書館はもはや書籍や資料を借りる場所というのでは十分ではない。2010 年 12 月に文科省から出された「大学図書館の整備について：変革する大学にあって求められる大学図書館像」(科学技術・学術審議会、学術分科会、研究環境基盤部会、学術情報基盤作業部会)^[3]は、「大学における教育に関しては、学生は授業を受けるだけでなく、より自発的な学習や実践の必要性が重視されてきており、大学図書館にもその支援の「場」の提供や図書館職員等による学習支援が期待されている」と述べ、そのために「学生の主体的な学修のベースとなる図書館機能強化」を期待するとしている。

ラーニングコモンズ開設はその望まれる改革となる。まずハード面での改革として、一人学習以上に集団での実践的学習を促す場とすることが目指される。次にハード面の改革にソフト面での改革を重ねる。文科省の上述の文書は、図書館は学生にとって魅力ある学習空間でなければならない、知的好奇心を刺激する、自ら学びたいと思わせるような仕掛けが必要だとしている。横浜キャンパス図書館でもハード面のリニューアルは終わったが、ソフト面では依然、改革途上である。今後、様々な企画を構築していかなければならない。本特集は、2018 年度の改革を振り返り、2019 年度以降の運用について考える場にもなっている。教職員だけでなく学生にも知恵を絞ってもらい、今後、利用者中心の「横浜キャンパスらしい」図書館を作っていきたい。

参考文献

- [1] 中央教育審議会 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申), 平成 24 年 8 月, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- [2] レイブ, J., ウェンガー, E., 『状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加』佐伯ゆたか訳／福島真人解説, 産業図書, 1993.
- [3] 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会, 大学図書館の整備について (審議のまとめ) - 変革する大学にあって求められる大学図書館像, 平成 22 年 12 月, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm